

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	有田 栄
主な担当科目	音楽教養演習Ⅰ, 音楽教養演習Ⅱ, 音楽教養演習Ⅲ, 音楽教養基礎, 音楽芸術運営基礎演習, 音楽美学, 西洋文化史Ⅰ, 西洋文化史Ⅱ, 博士音楽美学特講Ⅱ
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	学部・短大においては、学生の多様な背景(文化的背景の相違、レディネスの相違、学修目的の相違)を考慮してきめ細かく指導を行い、学生自身が自発的に「学びたい」というモチベーションを持つことができるよう工夫を試みる。大学院については、音楽に関する学びの専門性に対する学生の意識を高めるため、新しい知見を取り入れるとともに、研究倫理・職業倫理等に対する学生の意識を向上させる取り組みに一層力を入れる。とりわけ博士後期課程においては、自立した研究者としての自覚を促す教育を徹底する。
2025年の教育に関する自己評価	学部・短大の教育においては、セメスターの導入により、半期ごとに学修成果を確認するサイクルができたこと、また授業回数や試験のタイミングが変わったこと等を受けて、授業内容の見直し・精査を行った。特に音楽教養コースの各科目では、コースカリキュラムの特徴を明確に出せるインタラクティブな授業内容・方法を模索しつつ、社会にコミットした時事的な話題をもとにディスカッションやワークを行い、一定の成果を上げた。／大学院では、修士・博士とも専門性の高い内容を積極的に取り上げ、学生が広い視野から自身の研究やキャリアの展望を持つことができるよう指導に務めた。特に音楽と文化コースの各授業では高度な内容の指導を行うことができ、学生の学修効果を上げられたと考える。／今年度も学部・短大・院を通じて学生の進路相談・学修相談が多かったので、できる限り丁寧に応じ、学生と共に問題解決を試みた。特に今年度の傾向としては、大学院生からの相談および院の授業を担当する教員からの相談が増え、また教員側から大学院生に対する指導が必要となった回数も増えた。修士・博士ともに他大学からの進学者が大多数を占め、かつそのうちの大多数が留学生であるが、文化的背景(異なる大学文化、異なる国の文化)の違いのみならず、日本人学生・外国人留学生を問わず、基本的なマインド(学修に対するマインド、学生生活やキャリアに対するマインド、あるいは教員や大学というものに対するマインド)が大きく変化していると感じざるを得ない。これまでの学内での一般認識のように「留学生が増えてきたことに起因する課題」と捉えていたならば、事態の本質を見誤る。課題はますます多様化し、教員個人のレベルでは解決が難しいことも増えている。引き続き教育課程委員会、授業支援室、学生支援室、各専攻の教員と密に連携し、情報共有しながら対処していきたい。
2025年のFD活動に関する自己評価	学部・短大・大学院FD委員長としてFD活動に積極的に取り組んだ。全体研修会に関しては、現代の大学教員に必要な情報や職能開発、社会から求められる資質を常にリサーチし、研修会テーマ等として積極的に提案している。特に今年度は、大学院独自のFD研修会を復活させ、大きく変化している大学院教員の課題の共有に務めた。分科会FDでは、教員相互の連携の向上、また修士論文の指導に関する情報共有や、新任の教員とのコミュニケーションに重点的に取り組んだ。
授業改善のために取り入れた研修内容	大学院教育の現状

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1628 教員名:有田 栄

1)アンケート結果に対する所見

学部・短大・大学院を通じて、総じて学生が満足に感じていることが分かる。しかしニーズが毎年少しずつ変化していることは私自身感触として把握しているので、「これだけは外せない」という基幹の部分と、チャレンジングな新しいトピックとのバランスを常に測り・見極めながら授業を展開していきたい(一部、明らかに他の科目と間違えたと思しき回答が混じっていた)。また、アンケートの回答率が低いので、これについても工夫をしていきたい。

2)要望への対応・改善方策

毎回学生から強い要望(アンケートだけでなく口頭でも)がある西洋文化史について。「19～20 世紀以降＝近・現代の社会と文化の流れをもっと学びたい、扱ってほしい」という要望はもともとで、それだけ学生たちが、自分自身の生活や生き方と、社会情勢の激動との関係を切実に感じるようになったことの表れかと思う。それこそは学びの動機として最も大きく重要なポイントなので、その要求に応えられるような授業編成、場合によってはカリキュラムを考えたい。ただし私自身が現状のコマ数で20世紀以降の文化史を吸収するのは物理的に難しく、この授業の後継のことも考慮に入れた上で、新しい担当者探しをしなければならない時期だとも思っている。

昨年度の繰り返しになるが、これは文化史だけの問題ではなく、「現代の社会に生きる」というテーマの授業、すなわち現代社会で生きることを学生が自覚的に考えられる材料を提供できる授業こそ、いまの大学教育に必要ではないかと強く思っている。教養科目分科会においてもこれまで「現代の世界を学ぶ」授業を、「公民教育」や「(卒業前に)今こそ学ぶ民法と労働法」などとともに、何度か提案をしてきているが、いずれも残念ながら分科会の他の教員の賛同が得られず、実現に至る見込みはない。もちろん学内の様々なリソースは限られている。しかし教員は、自分達が学んで来たことをただ肯定し、反復し、再生産するようであってはならないと思っている。カリキュラムの完成年度のタイミングに向けて、現代をテーマにした学際的で多角的な新しい授業が編成できないか、引き続き可能性を探っていきたい。

そのほか、学部の卒業研究や大学院の修士論文・修士研究の授業については、現状の1年間ではなく、アンケートにもあったように、2年くらいかけてじっくりとマインドを養っていくような授業の運用を考えており、これも引き続きカリキュラムの切り替えのタイミングで実現できるように検討していきたい。

3)今後の課題

上記に述べた授業運用の改善のためには、教員個人の能力や時間では限りがあり、また誰か(例えば私自身)の個人に依存するようでは、持続性が危ぶまれる。教育の持続可能性を守るためには、教員同士が問題意識を共有できる良いチーム作りと、運用のためのシステム作りが必要で、そのためのコミュニケーションを図っていきたい。

以 上